



尼子経久と山中党が富田城を襲撃した図

▼研究史（木越 治）

この章だけは、他とは異なり、取り上げた論文についてのみ丁寧に解説するという記述方法をとっています。作品論の書き方のいろいろな例を示すという意図を持つてまとめたものです。

① 松田修 「菊花の約」の論—雨月物語の再評価（二）—

（『文芸と思想』第24号 昭和38年2月）

信義の物語と理解されてきたこの作品に対して、最初に異を唱えた記念碑的な論文である。

松田は、戦後の秋成研究に対する、もつともすぐれた批評者であり、この時期、『雨月物語』及び『春雨物語』に関して、通説に異を唱える論をいくつか発表しているが、なかでは、この「菊花の約」論が、もつともインパクトがあり、研究的にも意義深いものといえる。

松田の議論の特色は、病気で苦しんでいる赤穴を引き取り面倒をみている近所の主に対して左門が放った、

死生命しせいめいあり。何の病か人に伝つたふべき。これらは愚俗ぐぞくのこ
とばにて吾們ともがらはとらず

という言葉に関して、

「これら」とは何か。いうまでもなく、今あるじの述べた、

菊花の約 [きっかのちぎり]

「瘧病は人を過つ云々」の言葉を指す。あるじが左門を諫止したその言葉を、左門は「愚俗」のやからの迷蒙論として、一蹴しているのである。左門の瘧病観の正否は問題ではない。「愚俗」に対する「吾們」の優越感の性格も今はとかない。対談している当の相手の言葉を「愚俗のことば」と笑いさる、ここから左門の直情と径行をよみとれるにせよ、その直情と径行は、やはり偏奇と紙一重のもの、いな偏奇そのものである。あながち、今日的な立場から見ずとも、それはたしかに非常識であり、愚かさでさえある。

と論評しているところにもつともよく示されている。同様の指摘は、赤穴の語る尼子経久評価にもみられ、こういうふうにして作中の言葉から、左門や赤穴の問題を読み取っていくという研究的な流れは、ここから始まっているといえる。

ただし、いま読み直してみると、いささか言葉が激しすぎるのではないかと感じるところも多いし、単なる揚げ足取りにみえるところや、不要な饒舌にすぎない引用も目立つ。おそらく、この当時支配的であった中村幸彦・重友毅らによる無条件の秋成賛美に強く反発した結果のなせるわざなのであるろう。こうした松田の批判的姿勢は、現在の学会からはほとんど失われてしまったものであり、松田の遺志は、後続の世代がしっかりと受けとめていかなければならないだろう。

ただし、松田がこの論文でもうひとつ重要な論点として提出している左門と赤穴の間の「衆道」的な要素に関する指摘に関しては、論の正否以前に、「衆道」（すなわちホモセクシャル）をみる我々およびそれを取りまく社会自体の感覚が変化してしまっているので、ほとんど意味をなさなくなっている。

研究史を調べていると、否応なく、こうした研究を取り巻く状況の変化にも気づかされるのである。

また、松田論文の三年後に書かれた金井寅之助「菊花の約」の構成（『松蔭女子短期大学研究紀要』7 昭和41年2月）はそれ以前の研究史を整理したものだ、これには松田論文へのコメントがない。松田論文が注目されるようになったのは、このあとに掲げる青木や木越の論が出てからである、ということも、研究史を記述する人間としては、ぜひ書き留めておきたいところである。

この論文は、『松田修著作集第八巻』（右文書院 平成15年）で読むことができるほか、〇三三で公開されている。

なお、松田には、他に「菊花の約」の挿絵が『陰徳太平記』による、という重要な指摘があり（『陰徳太平記』と『雨月物語』『国語国文』33-9 昭和39年9月）、こちらは、この論文とは異なり、通説としてひろく受け入れられていることを付記しておく。

② 青木正次「雨月物語」その間と光（一）

（『藤女子大学・同短期大学紀要』11巻1号 昭和48年12月）

かなり迷ったが、五回連載の一回目だけをあげておくことにした。一編一編がどれもきわめて長いので、全部を読めという気にはとてもなれない。同じ著者による講談社文庫版『雨月物語』（全二冊）もほぼ同じ問題意識で書かれているので、こちらの方が読みやすければ、それでいっこうにかまわない。

『雨月物語』を連続性のある短編集として読む立場を貫いており、この論文では、序文「白峯」^{しらみね}「菊花の約」^{あさじ}「浅茅が宿」^{せど}をとりあげている。独自の概念を用いているところも多く、青木が考える『雨月物語』像がどういふものであるのかは正直なところ私にもよくわからないというしかない。当然のことながら、先行文献の注記はほとんどなく、よくいえば、独自性の強い、別の言い方をすれば、まことにひとりよがりな『雨月物語』観を論述したものである。

ただ、彼がひとりの読者として、真摯に『雨月物語』に向き合おうとしていることは確かで、その立場にブレは全くない。ここまで、読者の立場をつきつめた読み方というのはいまもなく、その意味で学ぶべき点は少なくない。

末尾の一文について、

く重い自戒がにじみ出ているのがわかる。左門の軽薄は一にその現実から離れた倫理にあるとせねばならないが、しかしそれでもその軽薄を掘り下げるより他に手はないではないかという苦しい息づかいももれてくるのである。左門はやはり赤穴のあとを追って「菊花の約」を

重んじ、「命を捨てて百里を」行く他はないのである。というふうには青木は述べている。ここでもそうだが、その他のところでも、青木はしきりに左門のあり方を「軽薄」の語で評している。しかし、それはきわめてレトリカルに用いられていることを理解すべきで、『雨月物語』本文の意味とはずいぶんへだたりがあることを理解しておくべきなのだが、しかし、青木が、こういうふうには左門を「軽薄」と評したところから、これ以後、「菊花の約」で「軽薄」なのは誰か、という「軽薄」さがしがはじまるようになる。

この論文は、後続のものとともに、CIIIで読むことができる。

③ 木越治「菊花の約」私案

（『国語通信』268 昭和59年9月）

冒頭と結語の問題、とくに、原話との関係で、なぜ、末尾

菊花の約 [きっかのちぎり]

容あやひはく軽薄の人と交はりは結むすぶべからずとなん

とあるのかを問題の出発点とし、作品分析にあたっては、松田修の指摘を受け継ぎ発展させたものである。結論として、「左門も宗右衛門もともに理想的な人間として描かれていない」「ふたりの間に成立している「信義」なるものは、一般の人間にもあてはまる普遍的な規範とみなすべきではない」「特殊な状況下にある人間たちの特殊な物語とみるべき」「この物語はきわめて倫理的な主題を扱いながらもその倫理自体を相対化した作品」というふうにまとめている。そして、そのように読んできたとき、冒頭と結語には含まれた教訓は、この作品にとつてどういう意味を持つているか、と問いかけて、このとき、冒頭部と結語に含まれる教訓はほとんど色あせ、無意味化されてしまうのではないだろうか。一般化・普遍化しえないきわめて特殊な「信義」の物語が語られたあとで

容軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなん

とくり返してみても、それは空しくひびくだけです。そして、かえって現実の読者には、彼ら自身が他ならぬ「軽薄の人」であることに気づかざるを得ず、それと交わりをむすばずに生きていくことが不可能であることを知らされるだけなのです。

と結論づけている。

作品に関する外的な情報をできるだけ排除し、テキストを「読む」ことだけに撤しようという意図で書かれたものである。それまでの多くの論文のように、作者の意図を論じようとしたものでは決してない。

「菊花の約」の登場人物の性格に疑問を呈するものや作中の「信義」の内実を問題にするものはそれまでもいくつか書かれているが、以後の研究史に対するインパクトの強さや、松田論文を再評価した、という点などを含めて、必読論文の一つに挙げておく。

なお、松田論文もそうであり、私のもそうなっているはずだが、左門や赤穴という人物の描かれ方を問題にし、単に肯定的に読むだけでいいのかという疑問を投げかけてはいるが、左門や赤穴を「軽薄」だと言っている方はしていない（前にも書いたが、青木論文で左門を「軽薄」とよぶのは、「菊花の約」の本文にいう意味とはあきらかに異なる、青木独自の用法として「軽薄」の語を書き込んでいるのである）。にもかかわらず、そのあたりのニュアンスを理解しないまま、以後多くの論文が書かれていくことになる。

なお、この論文は、『秋成論』（ベリかん社、平成7年5月）に収められている。

④ 小椋嶺一「秋成「菊花の約」の論—信義から軽薄へ—

(『女子大國文』100号 昭和61年12月)

木越や青木の指摘を受けて、左門・赤穴の人格的欠陥のもろもろをあげつらい、彼らこそが「軽薄」の人であると決めつける論文である。これまで、左門と赤穴を信義に殉じた人々として読んできた流れを、全く逆方向に向けようとする論である。

しかし、論文を読んでもみるとよくわかるが、作品の登場人物に対して勝手に言いがかりをつけているだけ、という印象がある。いわば、作品をはなれて、登場人物について自由に好き嫌いを論じたという格好である。

私としては、あまり見習ってほしくない書き方だと思っっているが、論の極端さにおいて、また、松田・青木・木越らの先行論文に対する誤読を浸透させることになったという意味で、反面教師的な意味合いの論文である。

この論文は、『秋成と宣長—近世文学思考論序説』(翰林書房、平成14年)に収められている。

⑤ 田中厚一

「菊花の約」論—翻案から創造へ・そして自立する「作者」—

(『異徒』8 昭和63年4月)

同人研究誌にひっそりと発表されたもので、現在もなお、きちんと読まれているとはいえないが、物語や小説を論ずるにあたって、踏まえておくべき「作者」「読者」「語り」というような基本的概念に対する理解がしっかりしている著者による論である。理論構築がしっかりとできている点を、後続の研究者はぜひ見習ってほしいと思う。

たとえば、松田修の「衆道」に関する論とそれに対する驚山の反論について、

松田修の論は、ある種読者の感性を代表している(すなわち、衆道的と受けとられてしまう)ようであり、今日でもその影響下から明確に脱している論述は実はない、といてもよいように思う。(中略)確かに彼ら二人の設定、とりわけ左門の設定から考えても、この場面に於ける彼は、決定的におかしいのである。多分に同性愛的な、エロティックな面を有していることは、読んでいる段で否定しきれものではない、と思う。

という評価をみてもその立場はわかるだろう。

ただし、田中は、結語部分に関して、木越のような理解を否とし、原話にある「結交行」への否定として読むべきだと論じている。が、この部分は、もうすこし、典拠の機能ということを考えたうえで書くべきだったのではないだろうか。

執筆者の権利を行使して、少し批判させていただくならば、私（木越）は、こういうふう「菊花の約」と「結交行」を並列的には読まない。つまり、「菊花の約」を読むにあたって（論ずるにあたってではない）は、テキストだけを自立させ、原話である「范巨卿鵝黍死生交」や冒頭に置かれた「結交行」等を後景に退かせたところで読みたいと思っている。田中の論は、この箇所に関する限り、「菊花の約」の横に原話を併置しないと成立しない論になっている。が、私の場合は、論述の都合上原話にふれたりするが、読み方としては、「菊花の約」のテキストだけで完結する読み方のはずである。『雨月物語』は、そういうことが可能な数少ないテキストであると私は信じている。田中も、他のところでは、ほぼそれに近い分析を行ってきたのに、ここだけ、原話とのかかわりで論じているのは、論理的に破綻しているのではないかと思われる。

それを別にすれば、田中がこの論文で「菊花の約」の人物造型の「理念性」をいい、『雨月物語』の「語り」のあり方を論じている議論のレベルは文句なしにすぐれたものであり、『雨月物語』の作品論は、このあたりを出発点にしなればならないと、心から思うものである。

なお、この論文は、『雨月物語の表現』（和泉書院、平成14年）に収められている。

⑥ 田嶋芳雄 「菊花の約」論—その背反性の意味するもの—

『日本文学誌要』58 平成10年7月

この他に論文を書いている形跡がないので、おそらくは、卒業論文か修士論文を活字にしたものであろう。研究者の道に進んでいない著者のものであるが、そうであっても、研究史に残るものを書くことは可能だという例として、特に取り上げてみた。

本文中にも示されているが、明らかに青木論文の影響下に書かれたものである。左門の解釈に二面性を持たせているという解釈は、論理的には整合性を持つが、やや思いつきめいていよう。しかし、松田論文の項であげた左門の「愚俗」発言について、

左門は知人の言葉を愚俗のものとして馬鹿にしている訳ではない。ただ観察し続けた日常社会に溢れる通念を、別世界のものとして客観的に捉えるようになっていたため、敢えてそれを避け、自己の方法を押し通そうとしただけなのである。つまり左門は日常社会を全く知らなかったのではなく、知ってはいたが、左門自身が居心地の悪い世界だと判断し、そこから少し距離を置き、書物の世界に入っていったのではないだろうか。私は左門のそのように何処か追い込まれた状態を見逃してはならな

いと思う。そうしなければ何故に宗右衛門に対して左門が過度に魅了されたのか説明がつかない。そしてそのことに注意すれば、二人が義兄弟の契りを交して、宗右衛門が左門の母に合うことを希望した時の、左門の「母なるもの常に我孤独を憂ふ。」という言葉が一層響いてくる。

というふうに批評しているあたりは、なかなか説得力があり、聞くべきである。全体に、言説分析において参考とすべき点がいくつもあり、作品本文の読みに対する姿勢を学ぶという点で参考になる論文であるといえる。

この論文は、[C311](#)で見ることができが、どういうわけか、国文学研究資料館の「国文学論文目録」のデータベースからはもれている。この種のもれは必ずあるものだから、複数の文献・データベースを照合してデータを収集するという努力を怠ってはならない。

⑦ 飯倉洋一「菊花の約」の読解―〈近世的な読み〉の試み―

（『テキストの読解と伝承』平成18年3月）

この作品の基本的な語の一つである「信義」や「軽薄」等の語彙について、同時代の用例から確認していくという作業は、たぶん、この論文ではじめて試みられたものである。また、

中山右尚が学生とのガリ版誌のなかで指摘したこと（ちなみに、この指摘は木越他編の「秋成文献目録」にも登載されているので確認あれ。たしか、飯倉氏からデータの提供を受けたと記憶している）をもとに、左門の行為が〈近世的〉通念からみて、あらまほしいものであったとする議論も説得力がある。研究史の理解も、当然のことながら、行き届いたものであり、全体として、作品の解釈の手前までは、まことに立派な内容であり、参考にすべき点が多い。

しかし、問題は、そういう手続きにつづいて展開される作品解釈にある。表題にいう〈近世的な読み〉というのは、おそらく、青木や木越のような読みの対極にある、同時代的コンテキストに配慮した「読み」ということなのであろう。しかし、テキストにある重要な語の意味を、同時代的資料によって決定していくことは学問的に当然とられるべき手続きにすぎない。また、それに基づいて作品を「読む」段階になると、〈近世的〉でもなんでもない、飯倉自身の「読み」が展開されているだけである。とすれば、〈近世的な読み〉というようなものがどこかに存在するような言い方は、単なる幻想でしかない。

いささかきつすぎる物言いと感じられるかもしれないが、というのも、飯倉のいわゆる〈近世的な読み〉を深化させた結果が、

菊花の約 [きっかのちぎり]

⑨ 「尼子経久物語としての「菊花の約」」

『日本のごとばと文化』 平成21年11月

だと思われるからである。しかし、こういう読みの方向に私は賛成できない。左門と赤穴の「信義」に批判的な読み方に疑問を呈するのはいつころにかまわないが、だからといって、作品において脇役ですらない尼子経久を、さも重要な人物であるかのように引つ張り出してくるような読み方は、「菊花の約」の作品論として成立しない、と私は考える。あらためていうまでもないことだが、作者も語り手も経久の側にいないことは明白だからである。

⑧ 山本秀樹 「「菊花の約」と徂徠学派―「信」と「軽薄」

『文学』10巻1号 平成21年1月

「軽薄」の語を、同時代の徂徠学派やその周辺の漢文系学者の著作の中から示しているのがなにより新鮮である。「菊花の約」への言及はあまり多くないが、今後、作品を読んでいくうえで新しい展開のヒントとなる、大切な指摘である。山本には、別に、木越論への反論を中心にした論もあるが、いささか聞き飽きた議論を繰り返すより、自身のこの重要な指摘をさらに作品論的に進化させる道を歩むべきであろう。

⑩ 三浦一朗 「信義の行方―「菊花の約」論」

『文化』(東北大学) 73巻3号 平成22年3月

最新の研究史をまとめた論文として掲げておく。学生には、まず、これを読ませ、そのうち、読むべきものはどれか、というふうに指導していくにはとても便利な論文である。ただし、作品の解釈に関して独自のものを出しているとまではいえないところが、ちよつと残念である。

【まとめと今後の見通し】

松田・青木・木越らによる問題提起が、「軽薄」さがしのように誤解され、その問題をめぐっていくつも論文が書かれてきたわけだが、この時期のものには、とりあげるべきものはあまりなかったというのが、今回、時系列順に関連論文を読み直しての正直な感想である。

しかし、もうそろそろ、その段階を超えて、新しい「読み」の提示があつていい時期である。

ただ、そのときには、左門や赤穴に対して示された問題点の多くをどう考えるか、という問いには必ず答えなければならぬ。その問題をネグレクトして、単に信義や友情賛美の小説と読むようなことがあつてはならないと思う。